

友人帳の世界に転生しました！

まるくら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

凍った階段で滑って転んで落っこちて頭ゴツンで死亡してしまった主人公、篠田 真は夏目友人帳の世界に転生した！

亀よりもナメクジよりも遅い更新になる（・ω・）

目次

転生しました！	1
第1！	4
主人公設定 遅いって？気にしたら負けだ	6
第2！	9
第3！	13
第4！	17
第5！	21
第6！	23
第7！	27
第8！	31
第9！	35
第10！	40
第11！	44
第12！	48

転生しました！

季節は冬、昨日の雪により中途半端に溶けた雪によって道は凍っている。

そして俺は就職氷河期・・・冷蔵庫の中身も氷河期でした。

俺の食生活危うし！すまないな冷蔵庫！お前も業務用調味料と氷しか入っていないのは嫌だろう！業務用調味料くれたパートの人々も使うための食材がなくてすんません！今すぐ買って来ますっ！

つてな感じでコートを来て財布を持っていざスーパーへ駆け出して1秒後、急ぐあまりに鍵を掛けていたことを忘れドアに思いっきり衝突。

鍵を開けて外に出たら足元が凍って滑って転んで腰うって痛みに悶えてたらドアに挟まれた。

腰を抑えて老夫のようになりながらも階段へ向かい足をかけたら・・・階段も凍って滑って転んで頭ゴツンで死にました。

「あつはは！災難だったね！」

そして俺は今真っ白な空間・・・天界という所に居て目の前にいるシヨタ神に笑われています。

「なんで嬉しそうなんだよ・・・」

「んー？だって、今までにこんな愉快的な課程で死んじゃった人なんていなかったんだもん！そうだなあ・・・笑わせてくれたお礼に転生させてあげる！」

マジか！神様のミスでーとかそんなテンプレな展開じゃなかったけど転生出来んだ！

「まあ、本当は輪廻転生のサイクルにのみこまれるまで待つのが普通なんだけどね？あ、転生はさせてあげるけど行き先は「夏目友人帳」の僕のヒーローアカデミア」「文豪ストレイドッグス」の3つに絞らせでもらうよ」

「あれ？全部俺が気に入ってたやつ・・・」

「へえ！僕と君は気が合うみたいだね。僕もこの3つが好きなんだ

よ。同じ趣味の人を見つけたついでに転生特典もあげる！」

シヨタシ：いや、神様と呼ぼうか。神様めっちゃ優しい！いやあ、やっぱりテンプレ小説の先入観は捨てるべきだな。テンプレだと残念な奴とか腹黒とか居たりするけど実際の神様はそんなことは無かった。うん。

「ありがとうございます！少し考えさせてください」

「うん。ゆっくりでいいからね」

時間もくれる神様マジ優しい。

にしてもどうしようかな・・・？できる限り今までの生活に近い暮らしをしたんだよな。

一応全部日本が舞台だし、都会で一番原作に近いのは文ストとヒロアカだけど・・・異能与個性が若干やつかいだよな・・・。

普通の人間に転生してもいいけどそれじゃあつまらないし・・・かと言って、異能とか個性もらっても戦闘できる気がしないし扱えなさそうだし・・・。

友人帳が一番良さそうだな。

「世界は「夏目友人帳」の世界でお願いします」

「了解。特典は・・・3つにしておこうか。どうする？」

「そうですね・・・これって、規定とかあるんですか？」

「んー、世の理に反すること・・・例えば、不死身とか、先見とかそういうのは叶えられないかな。それ以外なら基本的にはOKだよ」

となるとどうするかな・・・妖怪が見えなくちゃ意味がないし、見えても対抗できなきやキツそうだから強い妖力はまずもらうとして、あと二つはどうしようか。

いざ考えてみると案外出てこないもんだなー。あ、原作知識とかいかもしれない。動きやすくなりそうだ。

「とりあえず、強い妖力と原作知識をお願いします」

「強い妖力と原作知識だね。あと一つはどうする？」

「それが・・・あと一つが思い浮かばなくて・・・」

「んー、こちらで決めてもいいなら、考えはあるよ？」

「本当ですか!?!ありがとうございます！それをお願いします！」

「了解だよ」

神様本当にいい人だ・・・。

「じゃあ！さっさと転生しちやおうか」

「そうですね」

「今度は長生きしてね？そして、僕と色々語ろう？」

「はい！」

元氣よく返事をすると同時に・・・足元に穴が開きましたとき。

「へあ？」

「こればかりは僕にもどうも出来ないから、ごめんね」

神様の申し訳なさそうな顔は俺が穴に落ちると共に見えなくなっ
てしまった。もう少し神様の顔を見ておきたかった・・・。

ってまあ、それは今はいんだよ。その・・・さあ・・・

「俺ジェットコースターとかフリーフォールとか無理なんだ
よおおおおおおお!!!」

第1！

とてつもない浮遊感と落下の恐怖に目を瞑り、意識がブラックアウトしかけると背中が地面らしき場所に叩きつけられた。

うん。超痛いれす……。

目を開けばそこに広がるのは河川敷、そしてその川の向こうに住宅街。後ろには森だ。林かも知れないけど。

つーか……へえー、今どきの三途の川の向こうって住宅街になってるんですねえー……。

ごめんなさい何でもありません冷めた目で俺を見ないで！

だって！ここ何処か分かんねえんだもん！現実逃避するしかないじゃんか！

はい。すみません。落ち着きます。

ひとまず立ち上がって服に付いた雑草などを払い落とす。

俺の所持品は……スマホと三十万円と鍵の入った財布。あれ？意外と裕福じゃね？

スマホを見てみると画面の上が点滅していたのでメールが届いているのだろう。画面を開いて表示を確認してみると、『僕からだよ。』と、口調的に神様からメールが届いていた。

メールの内容はこう

『m9（へん）（へん）プギヤー』

「か、神様あ……？」

『ごめん。間違えたただだよ。消すの面倒だったからそのままだけだね。とりあえず面倒なところははぶいて大雑把に説明するよ。』

一つ、原作知識は知識検索に変えさせてもらったよ。

二つ、強力な妖力は君の体を半妖にさせる事で実現させてもらったよ。身体能力はば抜けて高いから気をつけてね。

三つ、最後の特典は成長にさせてもらったよ。あらゆる能力を鍛えれば鍛える程君は何でも出来るようになるよ。

つけさせてもらったのは所謂強化版ってやつだけど、上手く使つてね。

君自身の情報は知識検索で調べてみると良いよ。

それじゃ、頑張つてね』

強化版とかマジ嬉しい。m9（＾皿＾）プギヤーは驚いたけど。

神様が転生させてくれたし強化版くれたし、思いつきり人生・・・

半妖生？を楽しむしか無いな！

とりあえず家に行こう・・・

家の前についたは良いんだけど・・・一軒家・・・。

え、うそん、俺お金持ち？俺の家族お金持ち？マジで？

財布に入っていた鍵を取り出して家の鍵を開けますーの、入りま
すーの、靴確認しますーの、まさかの0！

Where is my family？

あれ？Where are my family だっけ？って、
んなこたあどうでも良いんだよ。

俺一人暮らし？一軒家で？しかも二階建てで？マジ？いや、きつと

家族は旅行にでも行ってるんだろーうな！多分！

ひとまず家の中を探索する。

と言つても、二階建てとはいえそこまでの部屋数はなかったのです
ぐに終わった。

リビングに入り置いてあったソファーに腰かける。

探索して分かったこと

家族居なかった！形跡すら無かった！

何それ虚あ・・・。

確かに新しい家族への対応とか分からんし別にいいんだけどな？

つてかホントに、所持金三十万とか一人暮らしの学生にしては凄す
ぎねえ・・・？

主人公設定 遅いって？気にしたら負けだ

設定

性別、男

名前、篠田^{シノダ}真^{マコト}

年齢、15歳

高校1年生

誕生日、10月9日

血液型、A B型

身長、169cm

体重、61kg

容姿、黒髪赤目

一人称、俺（私）

好きなモノ、猫、アニメ、原作キャラ

嫌いなモノ、面倒事、金欠、就職氷河期

両親は既に亡くなっている。

金銭面は親の貯金と表しているが、シヨタ神が定期的に仕送りをしている。

半妖であるため臭いが奇妙で、見知らぬ妖怪からは警戒されている。

転生してからの日々を物凄く楽しんでいる。

半妖の妖の部分は鬼であるため、出そうと思えば角が出る。

隠密行動時や、妖怪として行動する時は顔に布をつけて、妖怪の時は角を出している。

角は二角で真っ直ぐではなく後方に少し逸れている（終の面の角を想像していただけると）。色は黒。

また、妖怪の時は妖怪っぽい話し方+私。

身体能力が非常に高い。

見た目はヒョロい。

転生特典

知識検索：真が今まで知識として入れたことのある情報が引き出せ

る能力。なので本人が知らないことは神様が手を加えない限り知ることができない。

強力な妖力：夏目と同等、またはそれ以上の妖力がある。半妖にしたのは、半妖ならば強力な妖力を持っていて何かに巻き込まれても、自分で対処できるから。

成長：何かの物事を努力すれば努力するだけそれが身についていく。走り続ければ足が速くなるし、勉強し続ければ知識がどんどん身につについていく。

追加キャラ

性別、男

種族、鬼（水鬼）

名前、千歳ちとせ

身長、122cm

容姿、黒髪青眼（スカイブルー）

一人称、僕

好きなモノ、百歳、梅干し

嫌いなモノ、払い屋、辛い物

百歳と双子。一応どちらかといえばお兄さんにあたる。藍色の甚平。

性別、男

種族、鬼（水鬼）

名前、百歳ももせ

身長、122cm

容姿、黒髪青眼（マリンブルー）

一人称、ボク

好きなモノ、千歳、甘い物

嫌いなモノ、払い屋、辛い物

千歳と双子。一応どちらかといえば弟にあたる。

藍色の甚平。

今後の双子の予定。

真に（特に理由もなく）懐いて結局最後までついて行き、真が家に帰ってから真の側について、それを見かねた真が同居することを提案して同居生活開始つてところ。

そのうち原作キャラと関わってきたタイミングで誰かと引き合わせしてみたけど現段階では誰と引き合わせるかは未定。

双子の裏設定はどこかで出てくるかもしれないしまともに書けないけどどこかで伏線を挟むかもしれない。多分だいたい後付けになることが予想され。

原作キャラで多分真つ先に登場するのは夏目だと思うけどもしかしたらもつと別の、それこそ中級とかその辺りになるかもしれないけど、多分今後続きかければ一番接触があるのは夏目。もしくは払い屋さんの方々。

第2！

何だかんだで登校初日だぜ。そして校舎の中だぜ。

知識検索で分かったことなんだけど、どうやら俺は夏目達の通っている高校に転入生として行くことになるらしい。

何組になるんだろうな・・・。

確か、夏目と西村と委員長は2組で、田沼と北本は1組、多軌は5組だったよな。

最初から誰かと同じクラスってのも面白そうだけど、元々違うクラスで、段々関わってくつても面白そうだよな。

まあもつとも、転生者には・・・いや、ファンには良くある事だと思うんだが、本人を前にするとテンション上がりすぎて喋れなくなるとかあるから、段々関わるにしても最初から普通に関わるにしても、まずは自分を落ち着かせることからしていかないといけないかもな。

現在教室の前で待機中。

どうやら俺は3組に転入することになるらしい。3組は確か誰もいなかったはずだから、誰かと会うことはしばらくないだろう。

そういえば、時系列は今どうなっているのだろうか。

原作スタート時なのかそれより前か、もしくは後か。原作関係なしに進む場合もあるかもしれないが原作キャラに会わない事にはどうも判断しかねるな。

一番分かりやすいのは夏目の様子だけど、態々見に行く訳にもいかないし、学校終わってから妖怪達にでも聞き込みをするのがいいかもしれないな。

まあ、妖力で警戒されることもあるかもしれないが、そこは自分で何とかするしかないか。

「転入生の篠田真君です。挨拶を」

「篠田真です。宜しく」

とりあえず無難にやっていけりやそれが本望つてもんだ。

普通に生きて時たま何か良い感じに刺激でもあればそれで充分。

まあ、現実はその甘くないのは分かっているから、少し厳しいかもしれないが。

授業が終わって帰宅して、神様が用意してくれたのであろう着物を着て、何か、原作読んでた時に結構見てた布をつけて、知識検索した時に俺の額から鬼の角が出ることを知ったのでそれを出して家を出た。

因みに、角を出している時、というか、妖怪の姿になっている時は普通の人には見えないらしい。

少し勘のいい者に見えるのかは分からないが、少なくとも元々妖怪が見える者にしか姿は見えないだろう。

こんな姿で活動しているのを誰か人に見られるとなんか変な噂が立ちそうだから、こういう機能が付いていたのは好都合だった。

さて、聞き込みだが、妖怪達が居るのは大体森とかそこら辺だろうと思って今は森の中にいる。

実は森に入ってからそろそろ1時間経とうとしているのだが妖怪の姿を一度も見えていない。

何か居るような気配はするものの、その気配の位置が探れるほど俺は敏感ではないし、何だかただそこに居るよーって感じの気配しかないから単に俺が探し物が苦手なだけなのかもしれない。

とりあえず、誰か俺の目の前に現れてくれないかななんて淡い期待を寄せてみるわけだが、無理だなこりゃ。

妖怪が近くに居るような感じがしないんだよなあ……。

八ツ原にでも行ってみるか？いや、しかしなあ……夏目がまだ八ツ原に行っていないのなら意味がないしなあ……。

「お兄さんだれ？」

「!？」

突然後ろから声をかけられたもんだから驚いて肩を跳ねらさて後ろに振り返る。

誰も居ない。

「そつちじゃないよお兄さん。下、下」

「ん、あー悪い」

声に従って下を見てみれば小学一年生程度の身長の子供が2人。なんか角生えてないかコイツら。同類……って可能性は低いだろうし鬼の妖怪なのか？

「お兄さん妖怪なの？人なの？気配が妙だけど」

「俺は半妖なんだよ。お前らは？」

「僕／ボクらは水鬼。双子だよ」

水鬼……って確か水が操れるんだったか？なんか、スゲー強そう。だって水操れたら魚釣りとか火消しとかに便利そう。……不味いな、俺の発想力の無さが露呈してしまう。

「半妖なんているんだね。ボク、初めて見た」

「口調も声も似てるから正直どっちがどっちなのか判別出来ねえんだけど、名前は？」

「僕は千歳ちとせ」

「ボクは百歳ももせ、お兄さんは？」

「そうだなあ……んじゃマコってことで」

「マコ、ね、よろしく。どうせなら口調もそれっぽくしといた方がいいと思うよ？半妖ってバレると面倒臭そう」

「助言ありがとよ」

やっぱあれか？妖怪っぽい口調って言ったたらニヤンコ先生のあの口調だよな……。妖怪って夏目の所に名前を返してもらいにいくような奴以外は大体上から目線で高圧的だし。

「ボク達マコについて行っても良い？最近祓い屋が活発なんだ」

「僕達じゃ到底かなわれないから1人でも多く仲間が居た方が太刀打ちできるんだけど」

「そういうことなら、喜んで。よろしくな？」

「ありがと、よろしくー！」

子供って元気いいのな。いや、まあ、妖怪の見た目からは年齢なんてそう判断できるものじゃあないんだが。なんというかこう……話し方と雰囲気？見た目通りに子供なんだよな。

さあて妖怪モードといきますか！慣れないうちはそのまんまポロ

りと俺の口調が出てきそうだけど、俺の演技力を舐めるなよ・・・舐められるような演技力しか持ち合わせてないけどな。

仕方ないだろ！俺の親は女優でもなければ怪盗でもないんだ！あんないくつもの人を演じてる某小さな名探偵やその好敵手の怪盗殿みたいな演技が出来るわけないじゃないか！そもその根本的なものが一般人レベルだしな！下手したらそれより劣ってるかもしれない！あれだ、こう・・・スペック的なもので。色々と、節約術とか料理とか。駄目だ負けてそうな所しか思い浮かばない。

第3！

現在家。

「家!!」

「何さもう、煩いなあ」

なんかすまん。

いやあ結局何も無かったんだよなあ……っていうか何故か双子が来てから他の妖怪の気配すら感じなくなつたし。実は双子つて妖怪達に恐れられてたりしちゃうのか……？それかただ単に俺の運が無いだけか。

移動中話してる間に双子には森について色々教わつたのと、人間の生活に興味があるみたいだからそれについて話していたらいつの間にか双子に懐かれていたので、大体の食料は森で自分達で賄えるらしいからじゃあ一緒に住もうって事になった。うん、訳わかんねえよなこれ。なんつーか、懐かれたのはともかくとして一緒に住もうまでの流れが、わかめ。

流星にまあ相手の見た目は子供ですし？森で調達できると言っても生みたいですか？一緒に住むのにそれらをずっと食わせるつてのは俺の良心が痛むので、食料調達は俺に出来ないからどうしようもないにしても料理は作る予定だ。生よりその方が断然美味しい。健康にも悪くないしな！妖怪だから大丈夫なんだろうけど。

「ねえねえマコ、ボク銭湯行ってみたい!」

「銭湯？別に良いけど……ああでも普通の人には見えないからなあ……」

銭湯に行つてオレが普通に双子と話してると確実に幻覚でも見えているのかと白い目で見られてしまう。もしその中に学校の同級生が居れば俺の学校生活が終わる！それは何としても避けなくてはいけない……が、お願いはやっぱり叶えてやりたいし、双子を連れで行つたとしても人間のルールは分からないだろうから相手をしてない訳にもいかないし。さてどうしたものか……。

「他の人の事なら問題ないよ？僕達普通の人にも視認できるようにな

れるし」

「え？」

視認できるようになれる・・・だとう!?

「千歳さん、百歳さん、貴方達もしかして結構上級の妖怪だったりします？」

「何で敬語？ボク達は・・・そうだなあ、上の下つてところかな」

うわお、下の方らしいけどサラツと上級に食い込んじやってるのね。だからじゃね？妖怪が誰一人として居なかったの。

「えーと、じゃあ・・・銭湯、行くか」

「やった！」

俺今シヨタコンに目覚めないか心配になってきたぞ・・・あれか、まだ数時間しか関わってないのに早くも父性目覚めちやったのか？親バカだったりする？

現在銭湯！

大人料金の俺の分と子供料金の双子の分を払えば大浴場に直行できる。脱衣場への男女入り口の前は少しスペースが広くなっており、壁には小さな畳を敷き詰めた長椅子、そして銭湯温泉でお馴染みの牛乳販売機。普通の自動販売機も並んで設置されているので風呂上がりの後のビールも楽しめる。まあ今の俺は高校生で未成年だから飲めないんだけどな！まああと数年の辛抱か。

暖簾をくぐり脱衣場に入ってみれば、施設内に入って既に輝いていた双子の目がより一層輝く。そんなに来たかったのか、銭湯。早速双子が服を脱ごうとそれぞれ自分の服の裾に手をかけたので、それに待ったをかける。いや、だってやっぱり銭湯のルールは先に確認しておかないとな？

「テンションが上がってるのは分かるけど絶対に走ったり遊んだりしないこと。シャワーは通路の方にかからないようにすること。泳いだり水かけしたりしないこと。ゆったりと楽しみましょう！オーケー？」

「うん！」

よし、良い返事だ。

「つらたん……」

「つらたん……って何？」

「何でもないです」

風呂から上がってから、というか風呂の途中から、俺は疲れて意気消沈。

初回だから覚悟はしてたんだが、テンションが上がった子供ってのはこうも扱いやすくなるんだなあと思うくらいには素直にいうことを聞いてくれたのは良いとして、それ以外が大問題というかなんというか。

まずは銭湯にある物の使い方が全く分かってなかった。これは予想できたけど桶を見て「これって人を殴る物？」って聞かれた時はビビった。桶は女子が男子に覗かれた時にぶん投げるものだ(※違う)。

次は風呂について。風呂は温かいもの、銭湯もまた然り。双子には銭湯についての知識が全くと言っていい程無かつたもんだからサウナや冷水風呂の存在を知らなかった。結果風呂に入ろうとして間違えて冷水風呂に入ってしまった。「何かこれ冷たい……」ってしょんぼりしながら出てきた。サウナに間違えて入ると今度は「夏の間の池の近くに居るみたい……」とこれまたしょんぼりしながら出てきた。

最後は会話について。普通の風呂に入ってテンションが上がった双子はどうやら2人でずっと喋っていたようで、その様子を見たお爺ちゃんが双子に話しかけた。そこまでは良かったんだがその先が問題だった。お爺ちゃんと楽しく会話をしていた双子が俺の方に向いて「「後で頑張って鹿とってくる!」」と言って「え、ん、鹿!？」と俺が混乱している間にお爺ちゃんが笑いながら「わしも子供の頃はよく捕まえとったわい」とか言いながら双子に鹿の捕まえ方のコツを伝授して、結果教わった方法を早速試そうと考えた双子が銭湯から上がって早々に鹿を捕まえに出で行ってしまい、30分もしないうちに雄の鹿を捕ってきた。俺はそれを捌かないといけないわけで……。色々、な？

俺の救済処置は風呂上がりに飲んだコーヒー牛乳ぐらいのもので、正直とてつもなく疲れた。

次は・・・そうだな、頼まれたらまた来ようとは思うけどちよつとルール追加しようか。風呂上がりに野生の動物を狩ってこない、とかな。

第4！

前日、鹿を捌くのに物凄く時間がかかったがために睡眠時間を大幅にロスした結果、案の定寝坊したので双子には留守番を頼んでダッシュで登校し、飯食ってない腹減ったで力尽きて机に突っ伏し朝のHRを済ませた。

「キッチーだ・・・」

金はあるのにオレの腹は鳴ってるぜ・・・なんてこつたい。

「あ」

俺双子の朝飯と昼飯作んの忘れてきた・・・。ついでに俺の弁当も忘れてきた。何やってんだろうな俺。馬鹿か。馬鹿だな。腹が減ってツツコミにもキレが出ねえよくそつたれい。

ふう、と一つ息を吐いて教室内を見渡すが、誰一人として俺に話しかけてくれる人は居ないし俺から話しかけようにも大体の人達はグループ作ってるか妙に仲の良い二人で居るかで非常に話しかけづらい。まあ、俺前世でもわりとぼっちだったしな。今世でもぼっちかあ・・・。

あー、いや、でも一応妖怪ではあるけども千歳と百歳が居るわけだし、一概にぼっちとは言えないのか？しかし人間の友人が居ないのだしそれに伴って学校では話す相手というかつるむ相手が居ないんだからぼっちではあるのか。判断が難しいところだな・・・。

「篠宮君」

色々と思考に耽っている状態で急に声をかけられたからか、自分ではさほど驚いたつもりでもないのに肩が跳ねた。

声の主を伺うように振り返ればそこにはクラスの女子。

「どうした？」

「えっと・・・その、ごめん、実は私さつき先生に、昼休みにレポート内容の詳細が書かれたプリントを理科準備室からクラスに持ってくるように言われたんだけど、私保険給食委員の仕事があつて行けなくて・・・。私の代わりに取ってきてもらっても良いかな？もう一人の係の子も今日は休んで・・・」

「ああ、了解。良いぜ」

物凄く申し訳なさそうに言うもんだから流石にそんな頼まれ方されたら断れないしな。それに日本人は基本的にNOが言えないんだよ。断る理由もないし。

昼休み。

教室を出たままでは良いんだ・・・いや、良かったんだ。

理科準備室って何処。

ちよつと弁解させてくれ。まずな？俺はこの学校に来て二日目、昨日は校内探索とか諸々が頭から抜けてたから校内の事を全くと言っていいほど把握してなくて、しかも昨日は理科室とかそんな感じのところ行かなかつたし今日も今現在まで行かなかつたんだよ。だから、ほら、場所がわかるわけないじゃん？

いや、勿論校内図には目を通したさ。そりゃあそれぐらいは確認しておかないと確実に迷子になるし。でもな、無理だった。普通に迷ったわ、これ。

さあてどうすつかな・・・。

「あー」

後ろから突然聞こえた声に今度こそ驚いて肩が跳ねる。声の方に振り返れば見覚えのある顔が・・・つてか西村じゃんか！

「昨日来た転入生だよな？」

「え、あ、ああ、そうだけど」

スゲエ本物だ。なんていうか、アレだ、芸能人にあつた気分だ。いや、芸能人特有の特別感つつかオーラつつか、そういうのがないからどちらかといえばYOUTuberにあつた気分？どちらにしても全く落ち着かねえんだけどちよつと待って写真撮りたい。

「俺西村悟。よろしくな！」

「あ、ああ、篠宮真だ。よろしく」

コミュ力高い！決して俺のコミュ力が低いわけではない。と、思いたいが、コミュ力高い人見ると自信なくすよな。己のコミュニケーション能力に。

「なあ、理科準備室の場所教えてくんねえかな。場所まだ覚えてなくて」

「良いぜ、ついてこいよ」

快く了承してくれた。俺挙動不審じゃねえかな大丈夫だよな？西村にあつてこれじゃあ夏目に会った時俺発狂するんじゃないやねえか？それかテンション吹っ切り過ぎて固まる気がする。うん、発狂よりもそっちの方が可能性は高いな。どちらにせよ痴態は晒すことになるが。

ひとまず西村の後ろについていくことにするか。

「ここだよ」

「こんな近くだったんだな、ありがとう」

「どういたしまして！」

西村も理科準備室に用があるのか、2人で教室に入る。

プリントの方は案外早く見つかって、教室前方の机の上にクラスの人數分とそれにプラスして教室の掲示板に置かれていた。

プリントを抱えると、金属製の棚の引き出しから1枚のプリントを取り出した西村に向き直る。

「本当にありがとな。助かった」

「いいっていいって。それより、良かったら今日校内案内するぜ！」

「！良いのか!？」

「勿論。ただ、他にも俺の友達連れて紹介したいんだけど、良いか？」

「ああ、むしろ紹介してくれるとありがたい。流星にぼっちは嫌だしな」

「じゃあ、放課後教室に迎えに行くから待っていてくれよ。そんな時に俺の友達も紹介するしさ」

「何から何までありがとう」

良い奴だ。マジで良い奴だ。西村にも感謝するがその前にこの世界に転生させてくれた神様に全力で感謝しよう。とりあえず他にも色々なアニメの知識増やすように尽力するんでこの世界でまた俺が死んでしまった時にでも語り合いましようぜ神様。まあ、今これ言ったところで届いてるかどうか分かんないんだけど。

「教室戻ろうぜ」

そう声をかけてきた西村に頷くと今度は隣で足並み揃えて教室へ向かう。

「そういや、西村は理科準備室に何の用があったんだ？」

「授業に使ったプリントなくしてさあー。一応提出物だしないとやばいよなーって」

「なるほどな。高校の単位取得は面倒くさいもんなあ……。履修はともかく修得とか」

「だよな！面倒臭いよな！」

勉強に対する面倒くささだとか不満を語り合っていれば元々大した距離はなかったようですぐにお互いの教室についた。

「じゃあまた放課後な！」

「ああ、また後で」

迷子になるっていうちょっとしたハプニングはあったものの西村に会えたし頼まれた女子には感謝されたし、人助けになるってんなら多少ハプニングがあってもこういうのいいかもな。

第5！

さて、放課後だが。校内散策に付き合ってくれるということで集まってきたのは名乗り出た西村と北本と委員長、多軌だった。あれー？夏目と田沼は？

「ごめんな、本当はあと2人いんだけどあいづらなんか用事があるみたいでさ。また今度紹介するよ」

「あ、ああ」

あの2人が用事となるとやはり妖関連だろうか。勿論もつと普通の、何かしらの用事があるのかもしれないが、まあ、そこは夏目だしな……。妖関連の方が可能性が高いよな。

にしても……

「北本篤史だ、よろしくな」

「私は笹田純、よろしく」

「多軌透、よろしくね」

1日で4人も原作キャラに会えるなんて……！顔がにやけそうだ……。マジで頑張ってくれ俺の表情筋！ひくつくなよマジで、マジで。

「篠宮真、よろしく」

北本、委員長、多軌の順に握手を交わす。緊張で全然手に力入んねーんだけど大丈夫かこれ？ちゃんと握手してる？出来てる？ていうか伝わってくる体温がうわああ興奮してる俺気持ちわりい！

「よし、じゃあ校内散策といきますか！」

それからは校内を歩き回りながら、今ここに居ない夏目と田沼の話や俺がここに来る前にあったこと、そしてこれからあることなどを話した。

「ただいまー」

「おかえりー！」

家のドアを開けながら帰りを知らせれば双子が声を揃えて返事を返してきた。うん、帰って返事があるってやっぱり良いよなあ……。

「今日は熊狩ってきたよ！」

「何で熊狩ってんの!?てかなんで熊いんの!」

「さあー?とりあえず血抜きはしといたよ!」

「ど、どうやって?」

「ほら、ボクたちこれでも水鬼だからさ?水道の水を使ってこう・・・しゅーつと・・・」

「ああ、うんしゅーつと・・・」

つまりは血管に水を通して無理やり血を抜いたというわけですか。素晴らしく器用だな本当・・・。

「あ、あとねっ!昨日鹿を狩った時は首を搔ききったたから、流石にちよつと工夫した方がいいかと思つて、今回は熊の気管に水を張つて傷つけないようにしてみましたよ!」

「うん、そうそっか・・・」

何サラツとエグいことしてるんですかねこの子達はっ!いやまあいくら可愛くても妖怪ですしね?そりや、そこら辺の価値観は俺とは全く違うんだろうけど何この子達超怖い!うちの子になつてくれてよかつたあ!じゃないと俺この子達の可愛さに油断して死んじやうわ!

そろそろ変態具合が増えてきてやばいっすね俺!親バカどころじゃねーなホント。

「とりあえず・・・そうだな、熊捌いたら森に散歩行くか」

「わーいやつたあ!あ、明日は蛙狩つて来るからね!」

「ゲテモノは勘弁してください!」

第6！

登校初日から初めての休日。

「ねえねえ、散策行こうよ！」

目をキラキラと輝かせてこちらに強請ってくる双子。どうやら双子は家の中でゴロゴロするよりも外に出るのが好きらしい。

精神的におっさんみが出てきた俺からしたら外出って少し億劫なだけでな。

まあ、双子に強請られたら大抵のことならNOなんて言わねえけど。

「急いで準備するからちよつとまっててな。」

「はぁーい！」

うん、いい返事だ。

急いで着替えて顔に布をつけると妖怪モードに切り替える。

切り替えてって大事。これやらねーで妖怪っぽい・・・なんつーの？

高圧的な？口調？してたら俺ただのヤバい奴だからな。

俺そんなのヤダー耐えられなーい！

うし、我ながら気持ちわりいな。

「まだー？」

「あー悪い！今行く」

「うーん？何か、いつもと違うねえか？」

森について散策を始めてしばらくしてから思った。

なーんか違和感があるんだよな？その正体は分かんねえけど。

「強いて言うならいつもより森が静かかな」

「よく見に来る妖怪達が居ないみたいだよ」
なるほど。

つまり俺は奇異の目を向けられるのがもはや普通と化していたと。

何でだよ！視線がないってのが普通の日常だろ!?見せもんじやねえよってマジで言いたくなるレベルだわ！言わねえけど！

「んー・・・何か、東の方に固まってるみたいだよ？」

「何かあるのかもね。行ってみようか?」

「東の方って・・・行くのは別に構わないっつーかむしろ行かないと気になるというか・・・何で方向わかったんだ?」

「昨日降った雨の水で頑張った」

「そうかー。雨の水かー。そんな芸当も出来るのかー。」

「一応俺保護者的立ち位置にあると自負してたんだけどそこら辺俺いらねーなー。」

「俺の立場はいつたい・・・?」

「何に頭を抱えてるのか分からないけど速く行こう?」

「・・・そうだな」

東、東・・・あっちの方って実はまだ行ってないんだよな。双子が鹿やら何やら狩りたいっつーからっつー動物の多い西の方に行っちまって・・・。妖が集まつてるっつーから多分夏目絡みだと思うんだけど、はてさて今度は一体何に巻き込まれてるんだか。

うーん・・・。

ゴツツ!

「イッテ!何だ!?!」

今上から石降ってきたよな!?

「痛い?痛いと言ったか?そうかそうか!ふはは!案外弱いものだな!」

「ああ?」

「っ、そ、そのような態度をとっても怖くないのだぞ!貴様程度私の策にかかれば一瞬のうちに消し炭になるのだからな!どうだ!恐れ慄いたか!」

その声に上を見上げればなんと可愛らしいことか、満天星の花を両手でかかえた小さな少女胸を張っていた。母さんゴメン、俺もしかしたら親バカなんじゃなくてロリシヨタコンなのかもしれない。

「いや?全然恐くないけど」

「なっ」

いやだっつてサイズ感・・・拳大だしな。

「その気になればお前くらいなら握りつぶせるぜ」

「ひっ」

え、あ、やべ、ちびった。ええぐごめん脅し過ぎた。

てか双子、ここぞとばかりに妖がちびったやつを操って遊ぶな。鹿肉の形にするな。

「何で石を投げてきた？」

「あ、妖共が囓し立てるから・・・決して喧嘩を売りに来たとかそういう訳じゃないぞ！」

つまり度胸試し的なアレってことね。相手が俺だったから良かったものの、他の強い妖怪に同じことしてたら命は助からないだろうな、コイツ。ちっこいし、弱そうだし。

「し、しかし、噂では夏目とやらは珍妙な狸を従えていると聞いたが、まさか妖まで従えているのか？」

「え、いや、俺夏目じゃないんだけど」

「な！嘘をつくな！貴様のような妖力の強い者がそうそうに居てたまるか！」

居るだろ意外と。そこらじゅうに。

「じゃあ、今からその夏目が居そうな所に行くんだが、着いてくるか？」

「いいのか？」

「石投げないならな」

「もう投げないぞ！」

まあ、俺のちよつとした凄みでチビったもんな、お前。

ってか、突然来たもんだから思わず素で話してしまった。妖っぽい口調だぞ、妖っぽい口調。唸れ俺の演技力！小学校の学芸会の記憶を呼び起こす時だ！俺岩の役だったけどな！

「とりあえずお前は私の肩に乗れ」

「その口調似合わないぞ」

「黙らっしやい！身バレ防止のためにはこうするしかないのよ！仕方ないでしょー双子もそろそろチビったので遊ぶのはやめなさいー！」

「はぁーい」

素直でよろしい。そして俺のオカマ口調はよろしくない。セルフ

で鳥肌が立ったぜごんちきしよう。

「東へ行くぞ」

「「うん／ああ」「」

良い返事だ。

第7！

「そろそろだよー！」

「ありがとう。ここからは全員喋らないようにな」

遭遇イベント的にもっと声を出せよ！とか修造的な意見はいらない。べつに、大声で会話してボロ晒したくないとかそんなんじゃないからな。そりやもう、まったく。そんなことはないですとも。ええ。

まあ、どんな会い方をするにしても、出来れば友好的な関係が築けるといいなと思う。夏目は兎も角としてもニヤンコ先生の信用を得るにはかなりの時間がかかりそうだし。用心棒怖い。どうせなら酒とか持ってくればよかつたな。もしくは七辻屋の饅頭とか。

しばらく歩くと、視界の先に少し開けた場所が見えた。

壊れた鳥居がある。

「ここって確か妖が引き寄せられるとかいう・・・」

カイの話に出てきたのってここだよなあ多分。(6巻参照)

リアル聖地だし拜んどこ。

「何をしている。さっさと歩かんか」

肩でペチペちと人の頬を叩きやがるこいつはさつきチビった時とはうってかわって自由だ。さては懲りてないなこいつ。

まあ、俺もあんまり長居したくないから移動しますけども。

前に双子が祓い屋が活発になってるとか言ってたし、こういうところにいるとエンカウントしそうだ。

「あ、人間が居る」

「うっそ」

双子が指す方向を見れば確かに、乱立した木の幹のせいでかなり見えづらいが人型が見える。気になるなあ・・・気になるけど自ら見に行くべきかいなか！これで祓い屋だったら俺の人生、じゃなくて半妖生終わるんだよなあ！

「何をしている、見に行くぞ」

「お前何もしないくせにホント自由だな?!・・・あ」

やっべ今の声絶対聞こえた絶対気づかれたさつきとここから逃げ

「誰か居るのか？」

耳障りの良い穏やかさの引きだった神谷浩史にしては珍しい好青年ボイスだああ……。

「よし出向くぞ」

「今の一瞬でお前に一体何があつたのだ」

肩のやつはひとまず無視するとして、木陰から突然出てくると殴られるかもしれないので堂々と出よう。

「もし驚かせてしまったようであれば、すまなかつたな」

布の面をつけていることにこれ程感謝したことはない。だって表情見られないからな！出会い頭にめっちゃにやけてたら夏目に警戒されそうだし！

「友人帳の夏目殿であるとお見受けする。相違ないな？」

「そうだが……」

「ほれみろ、私は夏目じゃなかつただろ」

「むむ……そのようだな」

「えつと……？」

「ああ、すまない。実はこいつが先程私をお前と勘違いをしてちよっかいをかけてきたのでな。私の興味が大半だが違うということを教えるためにお前を探していたのだ。」

なんか所々口調がボロボロな気がする。いやまあ、ヘコヘコ頭下げてばつかった人間が、高圧的な口調が違和感なくできる訳もねーよな。成長特典で頑張ろう。

「友人帳に用があるわけじゃないのか？」

「ああ、それは全く……と言ったら嘘になるが、お前から奪おうとはしていないよ」

奪ったところで俺には手に余る代物だし、奪う理由もない。てか奪ったら殺される自信があるし、友人帳は夏目が持つべきだ。うん、奪いたくないってのが本心だな。こえーし。

「ところで、お前は何故こんな所に居る？」

「それは……実は、解呪に必要な花を探しているんだ。友人が呪いに苦しんでいて、どうしても必要だつていう妖が居るんだ」

なるほど、つまりはニャンコ先生で言うところのお人好しってやつか。しかし力になってやりたいものの俺はこの世界に来たばかりだし森のことには詳しくないんだよなあ……。

「なんだ、それなら私が持っているぞ」

「え」

ほれと夏目の方に向かって投げた満天星を夏目が慌ててキャッチする。

「え、何でお前がそんなもの持ってんの？」

「私は花守りなのだ。力を持ってしまったただの花を誰かに荒らされないように守っているのだ。今は結界の強化のために力のほとんどを使ってしまうってこんな姿だが、本来であれば貴様など遠く及ばない程の力があるのだぞ！」

へへんと胸を張ってるこいつはどうみたってちんちくりんにしか見えないが、多分こいつの言ってることは本当なんだろう。

「お前そんな凄い奴だったのか……」

「称えるがいいぞ！つと言っても、私も花も、神木からお零れをもらっているに過ぎないがな」

「それでも、そんな大切な花を渡してくれてとても嬉しいよ。ありがとう」

夏目が礼を言ううちんちくりんは耳を赤く染めながらそつぽを向いて悪態を吐いた。まったく素直じゃないやつめ。

「悪い、妖にこの花を届けなくちゃいけないから、おれは失礼するよ」

「ああ。呪いが解けるといいな」

「ああ！ありがとう！」

短い邂逅だったが中々な好印象を残せたんじゃないだろうか。これでニャンコ先生にも警戒されなくて貰えたらそれが一番嬉しいけどそんな好都合なことは多分ないよね！悲しいな！

「私もそろそろ戻ることにする。必要としているものが未だにいと分かった以上、荒らされないように守らなくては行けないからな」

「ん、そっか。今度甘味でも持ってってやるよ」

「ああ！待っているぞ！」

「・・・俺らも帰るか」

「そっすだね」

って、あれ？そっすいや俺ら自己紹介してなくね？

第8！

「な・ぜ・だー！」

妖として夏目との好調と言える邂逅を果たした俺は人間の方でorzつていた。

「何故夏目とエンカウントしないのか・・・！」

そう、あれから妖としても人間としても、どうしてか夏目に会うことがないのである。正確に言えば学校で見かけたりはするのだが、特に用もないし知り合いでもないのにこちらから会いに行くことができない。妖の方ではそもそも見かけない。

イベント来いやあ！と叫びたくなる衝動を抑えてひとまず普通に座る。

ちなみに俺が今いるのは裏庭的なところだ。他に人が居るところでこんなことをしているわけではないので安心してほしい。

まあ、ぼっち飯なんだけど。

「玉子焼きがしょっぱいぜ・・・」

寂しきで泣いちゃった涙でしょっぱいとかそういうことではなく、単純に朝弁当を作ってくるときに砂糖と塩を間違えた。高校の時から弁当を自分で作り続けてきたこの俺がこんな初歩的なミスをするとは・・・。

先に処理してしまおう。

「ぎやっ」

「ぎやっ？」

箸の先を見れば、なんだかよく分からない毛玉と目が合った。見た目的にはケセランパサランみを感じるのに妙に薄汚れているから違うような気がしてくる。ていうか多分違う。

「何してんの、お前」

「うまそう」

「・・・飯をくれてやるのはかまわないんだが、食事というのにはルールがある。何かわかるか？」

「しらん」

「食べる前にまず手を洗うことだ。洗ってこい」

お前さつき地面に手ついてたじやんとかそういうツツコミはいらない。何故なら俺にはお手拭きがあったから！あらかじめ準備しておいたのだよワトソン君。ホームズ多分こんなこと言わねーな。

とりあえず玉子焼きだけ食ってしまおう。

「あらった」

「いや、全然汚いんだけど」

何が洗っただ何が。仕方ないので俺のお手拭きで毛玉の体を拭いてやる。お手拭きの布が茶色で良かった。白とかだと流石に抵抗あるしな。

「ほれ綺麗になったぜ」

毛色はどうやら白であったようで、さらにケセランパサランみが増した。

「きいろない」

お手拭きをジップロックに入れてみると弁当箱を覗き込んでいた毛玉がそう呟いた。もしやこいつ……。

「玉子焼きが食いたかったのか」

コクリと頷いた。まさにその通りだったらしい。不思議と申し訳なきがないのはコイツが無愛想だからなのか玉子焼きが失敗作だったからなのか。

「あれ失敗作でどうせ美味くないから明日また作って来てやるよ。他に食いたいのあるか？」

「ちやいろいろのどこれ」

「ウインナーと味噌汁な。明日また同じ時間に来いよ」

「わかった」

毛玉はてーんてーんと跳ねながら去っていった。アイツあんな移動の仕方するから汚れるんだな。明日また拭いてやらないといけないやつか……。

妖に時間を指定したところで時計がないから分からないんじゃないかとか今朝思いついた不安は、無事というかなんというか、無駄な心

配に終わった。

「うまいの」

「早く食わせろと。先にお体をお拭きいたしますよお客様」

毛玉の体を拭く用を持ってきたおしぼりで汚れを拭き取っていく。昨日の今日でだいぶ汚れたな。

「うし、もう食っていいぞ」

毛玉が食べるようにと蓋に乗せて分けてやった玉子焼きに毛玉が飛びつく。余程食いたかったらしい。

味噌汁を飲むのには少し苦労していたようだったが、俺が弁当を食べ終わる頃には毛玉も食い終わっていた。食べる前とあとで体積が全く変わっていないのは何でなんだろう。

「うまい」

「そりやどーも」

「またきいろいろの」

「食いたいのならここじゃなくて俺の家に来ることだな。匂いとかで場所分かるだろ？」

「わかった」

どうやら俺はケセランパサランもどきの餌付けに成功したらしい。幸福なんてのは訪れやしないだろうが、妖とはいえ人に感謝されることってのはいいもんだ。

「おれい」

そう言って毛玉はぺつと何かを吐き出した。

「ガラス玉？」

パステルカラーが混ざったような綺麗な色だ。妖からもらったものだから人の目には映らないのかもしれないが、小さいから少し加工してストラップとして鞆につけてみるでもいいかもしれない。

「ありがたく貰つとく。じゃあ、またな」

またてーんてーんと跳ねながら去っていったが、その様子は昨日とは違ってかわって心なしかテンションが上がっているように見える。

結局、その日家に帰ると毛玉は双子とかなり仲良くなっていた。飯を貰いに来るどころか、このままだとコイツ家に住みつくな。別にい

いけども。

第9！

ケセラランパサランみたいな奴。もとい白毛玉にもらったガラス玉を加工しようとしたら工具がすり抜けたので、テーブルの上にコップを置いてガラス玉をそれに入れて反射を眺めていたら、もつとあると言つて白毛玉がガラス玉の落ちている場所に案内してくれることになった。

という訳で、今日は双子を留守番に置いて妖怪モードだ。白毛玉が頭の上に乗っているせいでなんとも気が抜けるが。

「あっち」

「シ〇イミ並に分からない説明やめろ」

と言うと、髪をちよちよいと引つ張られる。手があつたのか。まさか口で引つ張つてるとかないよな？

髪の毛を食われているのか否か、気になりはするが道案内に従うしかないので髪を引つ張られた方に歩き出す。しかし、これだけ小さいのに道を覚えているのは何でなんだ。俺の匂いとか気にせず話しかけに来たあたり目印を覚えとくとかそういう知能はなさそうな気がするんだが・・・妖には不思議が詰まつてるな。

「ひと」

「え？」

どこに？木々に囲まれた森の中で視界は悪いし、風に煽られて葉が擦れ合う音はするが、誰かが歩いているような一切聞こえない。すぐ近くに人が居るような気配もないし・・・コイツ何で気づいたんだ？「なあ、その、人ってどこにいるんだ？」

「あっち」

またちよちよいと髪の毛が引つ張られる。なんか痒くなつてきたぞこれ・・・。

個人的には白毛玉もいるし、何かあつた時が怖いので無視して目的地に進みたいんだが。そう考えて立ち止まっていると髪の毛を引つ張る力が若干強くなる。白毛玉の方は人がいる方向に行きたいらしい。仕方ないな。何かあつても俺はお前を助けられないから自分で

頑張つて逃げろよ。祓い屋見習いからすれば丁度いい餌食になりそうだし。髪を引っ張られた方向に進むと、しばらくして獣道に辿り着いた。

「あっち」

「この獣道を辿れってか」

獣道なんて、熊とかでたらどうしパキッ

パキ？

枝が折れたのとは違う無機質な音に、恐る恐る何かを踏んだ足を持ち上げる。

そこにはレンズが割れ、フレームの歪んだ眼鏡が落ちていた。

「あゝやった」

眼鏡を持ち上げると、白毛玉が俺の頭から腕を伝って手に乗り、眼鏡の匂いを嗅ぎだした。

「おなじ」

「進んだ先にいる人の匂いと同じってことか？」

「そう」

・・・本当はチラツと顔を覗くだけで退散しようと思ってたのに。元は落としたのだらうとは思うが、それでも壊してしまつては流石に弁償しなくては。菓子折りとかつて必要か？マズイな、氷河期を越えられなかったせいで身につかなかつた社会性がここにでてる。

「いく」

「ちよつ、分かつたから髪の毛を強く引っ張るな！」

地味に痛いからやめろ！禿げるわ！そもそもなんでコイツこんな人に会いたがるんだ。匂いの元の人に思い入れでもあるのか？

・・・なんて、考えたところでどうしようもない話か。

せめてこの先に居る人間が祓い屋じゃありませんように！半妖になることで強い妖気を神様から貰つたものの、正直俺力の使い方とか分からないからな・・・。

あ、でも検索の能力使えば力の使い方多少は教えてもらえるのでは？半妖だから恐らくニヤンコ先生みたいな力の使い方でもできそうだし。なんというかこう、破ア!!みたいな。

ダメだ、思考がギャグ路線に寄ってどうしても現実逃避みたくなってしまう。現実逃避なのは間違いないけれども、逃避しすぎるといざというとき反応できなくなるからここらでやめとこう。

「なあ、その人とは知り合いなのか？」

「ちがう」

「違いのかよーあ、知り合いの知り合い、とか？」

「そう」

「なるほど」

つまりは、その人経由で会いたい人が居るって訳だ。

できれば俺を巻き込んでほしくなかったんだけど、なんてため息をついていると、森をぬけて少し開けた場所に出た。

と同時に、全身を謎の寒気が襲ってくる。悪寒つてやつだ。全身に鳥肌が立った事を触っていなくても分かってしまう。

「っ戻るぞー！」

「だめ」

「はあ?！」

駄目って何で！俺は一刻も早くこの場所から逃げた

「おや?！」

「ぴっ」

思わず情けない悲鳴を上げてしまったが、待てよ?この透き通ったミステリアスな雰囲気纏ったその声は。チリンという鈴の音と共に気配が一つ増える。恐る恐るそちらの方に振り返れば。

「祓い屋の、名取か」

今、本当に今は会いたくなかった・・・！信用は出来る人だと思っても名取さんが甘いのは恐らく夏目に関することだけではないだろうか。夏目が居ないこの場で、俺のように力の強い者に会って、何もされずに帰ればいいんだが。

せめて的場さんじゃなかったことに安心するべきかな・・・。

そう迷いつつも、名取さんからその隣に視線を移す。そこには柊が居る。柊が居るといふことは、夏目は既に名取さんに出会っているということだ。

彼の優しさに、理解者が居るのなら、良かった。

「君は、どうしてここに？」

「・・・私はコイツの付き合いで来ただけだ」

そう言っつて白毛玉を見せるように手のひらに乗せる。

「お前が会いたかった人つてのはこの男か？」

「そう」

「会いたかった？」

「どうやら、お前の知り合いに用があるらしい。橋渡しをしろということだろうさ」

名取さんに真っ直ぐ見られることがこんなにも怖いとは。的場さんみたいに見境のない人じゃなくて良かった・・・いや本当に。

しかし、さつきから悪寒がどうしても消えない。名取さんが現れたことでもしかしてここに陣でも隠しているのではと思ったが、どうやら違うらしい。悪寒は先程から増すばかりでちつともおさまらない。

「用、というのは？」

「なつめ」

「夏目に？」

「白毛玉ストップだ」

慌てて白毛玉の口を塞いで名取さんに背を向ける。まさかこいつの口から夏目の名前が出てくるなんて思わなかったんだが！しかも名取さんの前で！

なんとというか、この件に名取さんが関わることが確定したような気分だ。

一先ず状況が分からないことにはこの先の話をコイツに任せたくないという思いがある。現時点で名取さんが夏目の友人帳のことを知らない場合、こいつの口から友人帳関連の話をさせるのは不味い。

「白毛玉、お前何で夏目に会いたいんだ？」

「なまえ」

「！友人帳に名前があるのか・・・。いいか白毛玉。お前の協力は俺もしてやるが、その代わりにあの被い屋の人に友人帳のことは絶対に話すな。いいな？」

「わかった」

名取さん達に聞こえないくらいの小さな声で話して、向き直る。

「どうかしたのかな?」

「すまない、私もコイツがどうしたいのか詳細を知らなかったのだから今再確認していたところだ。：折り入って頼みがある。コイツを、夏目に引き合わせてはもらえないだろうか」

「素直に協力すると思うかい?」

「分かっている。アンタがコイツと夏目を引き合わせることで、コイツが夏目に良くないことをするかも知れないのは、イ”ツテ!」

噛みやがったコイツ!

「噛むな馬鹿!良くないことをするってところに腹立ててんだろうが、仕方ないんだよ!これはお前自身がどう考えているかじゃなくて信用の問題なんだ!不満なのは分かるけど一旦落ち着け」

「ふふ、あはははは!なんとも、気が抜けるね。いいよ。どうやら悪い妖ではないようだし、協力しよう」

「本当か!」

「ただし、夏目に危害を加えるようなことがあれば即刻退治させてもらう」

「ああ。私も、コイツも、お前の友人に決して害を与えないことを約束しよう」

最初から危害を加えるつもりなんてないが、ひとまずはそれを条件として、お互いに握手を交わすのだった。

第10!

ということ、夏目の元へ向かうためにあの場から離れることが出来たので俺としては心底安心した。しかし、どうしてあんなにも嫌な感じがしたのか……。ってそうだ、眼鏡。

「祓い屋よ」

「何かな」

「これを」

懐から、俺が踏んで割ってしまった眼鏡を差し出す。大切な商売道具を割ってしまったって本当に申し訳ない……。特に名取さんにとっては妖を見やすくするための物だし。

「落ちていたのを踏んで壊してしまった。済まなかったな。弁償はする」

「ないと思ったら落としてしまっていたのか。ありがとう。でも弁償って、どうやって?」

「私は普段人間界に溶け込んで居る故、一般通貨は持ち合わせている」
神様が口座に振り込んでくれているらしい生活費を削れば、けどね。最初は、家には存在していた欠片すらないが両親が実はどこかに居て、定期的に仕送りをしてきているのかなと思っていたのだが、そんなことはなかった。不思議に思ってた神様にメールしてみればそもそも両親は居ない……。亡くなったことになっていて、定期的に仕送りをしてきているのは神様だった。しかも双子の分を含めても贅沢ができるぐらいの金額を入れてくれている。

あまり甘え過ぎるのは良くないけど、高校卒業するまでは少し甘えさせてもらおう。あ、贅沢できるからと言って贅沢に使わないからかな? 貯金だ貯金。就職氷河期始まってからの金欠が一番怖いんだから。「それなら、弁償の代わりに君が普段人間界でどうやって活動しているのか教えてもらえるかい」

「どうということはない。ただの学生だ。……。夏目とは同級生だな」

「夏目を知ってるのはそれでか」

「ああ」

知ってるのは元からだけど。

と、そうこう話しているうちに夏目の家に着いたみたいだ。白毛玉が頭の上でびよんぴよん跳ねているので余程嬉しいのだろう。

俺も何だかんだ言って夏目の家を実際に見るのは初めてなので、なんとも感慨深い気分だ。夏目がやつと落ち着けた場所で、夏目が手放してはいけない場所。

見上げていた視線を下ろして玄関の扉を見れば、何か白いヒラヒラしたものが玄関の扉に挟まっている。紙人形だ。

「アレはお前のか」

「ああ。夏目が家に帰ったら戻ってくるように術をかけていたんだ。この様子だとまだみたいだけど・・・」

「白毛玉は待つなんて甲斐性ないぞ」

「だろうね」

「あっち」

「っ”あ”! 引っ張るなっ”ての!」

ハゲになるでしょーが! 次やったら頭の上から下ろすからなマジで!

「ここから先は白毛玉が分かるようだから案内させよう」

「分かった」

白毛玉が俺の髪の毛を引っ張り続けるのでとりあえずその方向に向かうことにする。これ、そのうち頭皮の感覚が麻痺して方向が分からなくなりそうだな。いやまあ、それくらいなら白毛玉が怒るだけだからいいけどハゲにはなりたくねーなー! 女子にハゲで不潔って言われてた高校の先生がマジで可哀想だった。そして自分も将来そうなる可能性があるのが辛い。オジサンはね・・・いくら清潔にしても中途半端に禿げると不潔に見えてしまう悲しい生き物なんだぜ・・・。あつ辛い。

「マコ」

「うん? どうかしたか白毛玉」

「ちやいろいろ」

「あーはいはい、腹が減ったのね」

珍しく名前を呼んできたと思っただらこれだ……。

ため息を吐きながらカバンからワインナーを輪切りにしたものを詰めたタッパーを取り出す。しっかしこの、ちゃいろいのって言い方は何とかならないものか……。茶色と言えば、って連想でなんか妙なものを渡している気分になる。土や木、食事中にあまり口に出したくないものも含めて。

白毛玉には俺の頭の上でワインナーを食べてもらう訳にはいかないので手のひらに降りてきてもらう。ウエットティッシュで適当に拭くと一瞬嫌そうに身動きをしたが、我慢してくれなきゃ一生ワインナーやれねーからな。いや、一生はさすがに嘘だけど。

「そういえば、名取お前自分の式はどうしたんだ？」

「少し、調べたいことがあってね」

「別行動か。名取と夏目が手を組んだとかいう噂をしている小物も居たが、夏目には？」

「何も」

何も……ってことは、夏目の家の扉に紙人形を引っ掛けてたのは、ただ近くまで来たから会えたらいいなぐらいのってことか。とは言え、その調べたいこととやらにあの夏目が関わる可能性は大いにあると思うんだけど。なんたつて主人公。トラブル吸引体質だからな。

「ところで君、マコっていうのか」

「ん、ああ、篠田真。でマコ。人間として生活している時の渾名からな」

「そう呼んだ方がいいかい？」

「そうだな、妖で居る間はそうしてくれると助かる」

「分かったよ」

「ところで、ずっと気になってたんだが、妖が人間の世界で暮らしていることに関しては何も思うところはないのか？」

「人に危害を加えるような事がなければ、一応黙認しているよ」

なるほど、名取さんがカイを封印するために動いてたのは、カイが井戸に封印されている妖を外に出そうとしていたからなのか。

しかし、人間に化けられる妖は力が強いし、人間に危害を加えようと

したとして、それを止めるのは苦勞しそうだなあ。的場さんとかあつさりやつてのけそうだけど、あの人容赦ないし。

考えてみれば確かに、名取さんは最初からニヤンコ先生のことを退治しようとかはしてなかったような。良い大人だ……。今ここで名取さんに会って話ができたのはかなり幸運なことだったような気がする。俺の名取さんに対する解釈が間違っていることもわかったし。でも的場さんにだけは絶対会いたくねえけど。解釈違いとかしやうもなく怖え。

「ごつち」

「おう」

白毛玉の引つ張る方、空き地に歩を進めると、シロツメクサが咲く上に、白い毛の山に押しつぶされている足があった。

「なつめ」

「え、夏目!？」

俺の驚いた声に反応して、白い毛の塊がウゴウゴと動いて、中からかすかにくぐもった声で助けてくれと聞こえる。名取さんと一瞬目を見合わせてから、慌てて二人で山を崩すのだった。

第111!

「し、死ぬかと思った……」

毛の塊に押しつぶされていた夏目も含めて、三人で荒くなった息を整えようと息を吸い込む。山を崩してわかったが、どうやら白毛玉の仲間っぽい奴らが重なって山になっていたようだ。押しつぶされたのは夏目なのに、体力なさ過ぎて俺も死にそう。

「助けてくれてありがとうございます、名取さん。それと……この前会った時は、名前聞いてなかったよな」

「マコと呼んでくれ。あだ名のようなものだ」

「ああ。ありがとう、マコ」

ぐっイケメンの笑顔が眩しいっ!!あれてか、キラキラ発動系イケメン俳優と性格の良すぎる細身イケメン現役DKに挟まれた凡人俺の凶。俺だけ作画コハエ〇スとかになっってくれたりしない?じゃないと俺苦しくて死んじゃーう。

あつ顔布で見えないから関係ない?ってそんなことより。

「この毛玉達は……」

「道を歩いていたら突然後ろから転がってきたんだ。走って逃げたけど、追いつかれてこんなことに」

転がってって、なるほどそれでこいつら、揃いも揃ってうちの白毛玉に会った時みたく毛並みが乱れてるんだな。

「おい、白毛玉、」

『なんだ』

「うっわ怖っ!全員でこっち向くな!」

小さければいいってもんじゃない。大量の目が一斉にこっち向くとかどこのホラーだよ!

「お前らじゃなくて、うちの、」

「なかま」

「なかま」

「なかま」

一匹喋りだしたかと思えば、それに呼応するように他の毛玉達が言葉を繰り返す。いやこつわ！やつぱこれホラーだろ！催眠術をかけられて自我を失った果てに化け物の仲間にはされるとかそういう系のホラーだろ！

「やいづ」

「最後？」

毛玉達の言葉に困惑していると、頭の上に乗っていた白毛玉が跳ねて毛玉の塊の中へ飛び込んでしまった。

「やいづ」

「やいづ」

「やつと」

「やつと戻れる！」

毛玉達が歓喜する毎にバラバラに呟かれるその声の一つにまともっていく。これあれだ。主人公が考えなしに行った行動が、巡り巡って敵に塩を送る形になって、敵が本来の力を取り戻す的あるある展開だ！なんて考えているうちにうごめく毛玉達の境目がわからなくなっていく、四肢のある獣のような形を取り始めた。それもなかなかビッグサイズな。

「いや犬じゃね？」

真っ白くて、ふさふさの毛で、かなり大型な……これサモエドだあ。

「最後の一体を連れてきてくれたこと、感謝する。マコよ」

「え、あ、はい」

「茶色いのと黄色いのが、実に美味かったぞ」

「ウインナーと玉子焼きって言ってくれないか」

「……玉子焼き美味かったぞ」

「さては横文字苦手だな？」

あ、目を逸らした。じゃない。さつきから何を口走ってるんだ俺は。いや気が動転してるだけなんだけど、それが、えー、あーっと、落ち着き給え友よ。私はこんななりをしているが、あまり力を持たない性質だ。怯える必要はない。言っただろう、お主には感謝しているのだ」

「感謝って、いったい何を」

「私には、大妖が休むうろを守るという役目があったのだ。誰に頼まれたのでもないが、小さきもの達が口々に不安を漏らすのが哀れで、この持て余す身体を小さきもの達の為に使ってやろうと思っただけ。しかしどこから噂を聞き付けたのか、私の前に新参者と思しき払い屋がやってきたのだ。力をつけるために手練れの手助けを受けていたのだろう、やたらに力の強い術のかかった符を打ち込まれそうになって、元々力の弱い私は散り散りになって逃げたのだ。件の大妖は私と払い屋が争っているうちに逃げていたしな。ただ、散り散りに逃げたせいで上手く考えることも、上手く話すこともできなくなってしまっただけ……長年募らせていた、夏目に会いたいという思いだけが私に残されていた。マコにだ会ったのはその最中のことだ。夏目の匂いを辿っていくうちに奇妙な匂いが混ざってきてな。気になってその匂いを辿ってみれば、その先にマコが居たのだ。人の形をして、人の匂いがするのに、何故だか妖の匂いもする。しかも、近づいてみれば私の姿が見えると来た。もともと夏目の匂いを追ってそこにたどり着いたのもあって、マコと共に居れば夏目に会えるやもしれぬと行動を共にすることにしたのだ。食わせてくれたういんなあや玉子焼きが美味かったのも理由の一つではあるが」

「それで、見事この通り夏目に会うことができた」と

「ああ。そして、運よく元の姿を取り戻すこともできた」

「名取さんに会いに行ったのは？」

「夏目の匂いがついていてから、関りがあるのだろうと思っただけ」

「夏目に会いたいからと話しかけてきた妖は初めてだよ」

「でしようね。払い屋なんて危険性のある相手に態々話しかけに行くような妖なんてそういないだろうし。匂いが奇妙とかいう点においては、俺も危険性のある相手になるのだろうに、こいつ何の警戒心もなく飯をせびりに来たからな。かなり力が強いらしい双子ともすぐに仲良くなっていたし。力はなくとも、なかなか肝の座ったやつだ。」

「さて、夏目殿」

「ああーそうだ、名取。お前に少し聞きたいことがあるんでこつちに
来てくれないか」

「何かな」

夏目達の様子が見えないところまで名取さんを連れてくる。

危ねく、夏目が名取さんに友人帳のことを伝えているのかわからな
い以上、あいつの話の名取さんに聞かせるわけにはいかないからな。

「それで、聞きたいことって?」

「お前が夏目に隠して調べていることだ。夏目と生活圏が近い分、夏
目がそれに関わらないよう配慮できることもあるだろう」

「それは助かるけど、何故君が?」

「守りたい者がいるのも、傷つけないと思いうのも、妖も人もそう変
わらんだろうさ」

まあ俺ほとんど人間だけど。

「……最近妙な妖がこちら辺に現れたらしくてね。私も他の払い屋伝
づてに聞いた話だし、噂が広まって払い屋が集まる前に私が何とかし
たいんだ」

「妙な、というと?」

「強い妖を二体連れているらしい。鬼だとか言ったかな。あとは、人
の匂いを纏っているだとか……」

「スウー……」

俺じゃねーか!!

第12!

「あー、その、なんというか……すまない」

いや本当にすみません。まさかそんな騒ぎになってるとは思わなかったっていうか、俺まだ何もやってないんだけど！居るだけで皆の視線を引きつけちゃうなんて、俺ってば存在が罪く♡じゃねーんだわ！気色悪いな！

「何か知ってるのかい？」

「知つてるといふか、その噂の出处は俺だと思ふ」

噂を広めたのは多分、俺や双子の様子を遠巻きに見ていた小物妖たちだろうけど。妙な奴が居るぞ、なんて話してるうちに、それが誰かの式の耳に入って払い屋に伝わったんだろう。

「双子の鬼の妖とは家族みたいなものなんだ。今日は家で留守番させてる。森には、散歩で良く」

「なるほど、もう手遅れって訳か。全く、夏目はどうしてこう、厄介事に首を突っ込むのかな」

俺が友人帳のファンなせいです、すみません。低頭平身して謝ります。って待てよ。

「なあ、その話、もしかして的場にも」

「伝わっているだろうね」

「おうまい……」

「まあ、的場に気配に聡い式は居なかった筈だし、当分は人間に溶け込んで大人しくすることだね」

確かに、原作での場さんが扱ってたあの黒のつぼ達が、終みたいに事前に人や妖の気配を察知するような描写はなかった。気配に聡い式が居ないってのは恐らく、右目の約束を反故にしたことで、まともな妖とは契約が結ばなくなったからなのだろう。目標が定まってるならともかく、的場さんに俺の姿を知られていない今、人間として暮らしていれば的場さんを避けることはできそうだ。けど。

「それでいいのか？てつきり、他所にいけとか、夏目に関わるなどか言われるのかと」

「他所に行けて、一体どこに？こちらとしては、的場より先に君が見つけられただけ儲けものだよ。いざという時の対策も取れる。それに、関わるなど言ったところで夏目は言うことを聞かないだろうしね」

「ああー」

確かに。俺がいくら夏目を避けたところで、縁が巡り巡って結局どこかしらで関わることになりそうだ。それも多分、丁度俺が危機に晒されているタイミングで。ほとんど話したことがないような妖でも、相手が困ってるならきつと夏目は見捨てられないだろうし、それなら最初から厄介事に関わるつもりで対策を練る方が名取さんも立ち回りやすいだろう。

もつとも、そうならないように俺が気をつけなくちゃいけないんだけど。

「わかった。双子にも、不用意に出歩かないように私から伝えておこう」

「その方がいいだろうね。……それにしても、君、『俺』と『私』、どっちが素の方なんだい？」

「黙秘権を行使する！そんなことより、そろそろ夏目達の方も片付いただろう。戻るぞ」

「わかったよ」

イケメンは肩を竦める動作ですら様になる。クツソかつこいいな、羨ましい。一人だけ画風を少女漫画にしてやろうかコノヤロー。俺の平凡さが際立って悲しくなるだけか……。

意気消沈しながら夏目達の方へ戻つてくると、サモエドの頭を優しい顔をした夏目が撫でている所だった。犬を撫でるだけで神々しく見えるイケメンって、居るもんなんだな。最早何も感じない。とか感じてはいけない。こんなんで一々ダメージ受けてたら、美男美女ばっかのこの世界でやっていける気しないしな！大丈夫大丈夫！別に、ブスって訳じゃないんだし！普通顔だ普通顔！普通……普通ねえ、うん。まあステルス機能としては抜群ですしお寿司。この普通ってステータスが就職氷河期に牙を剥いてきたことなんて別に気

にしませんし? やめよう、なんか虚しくなってきた。

「あ、名取さん、マコ。どこに行っていたんですか?」

「……どうやら、そちらの用事も終わったみたいだね。ところで、犬の妖の君はこれからどうするのか? 話を聞いたところ、もううろを守る必要は無いんだろう?」

「うむ。大妖はもとより、祓い人を警戒して小さきもの達もあの辺には近づかぬだろう」

静かに伏せられた目はどこか寂しげで、じゃあ俺の家に来ないかって、少し前までの俺なら声をかけてたと思う。けど、的場にまで俺の噂が広まつてるってわかった以上、俺のところに来てても自由に行動させてやることはできないし、何よりコイツまで危険に晒してしまうかもしれない。とはいえ、誰もいない元の場所に返すつても可哀想だ。コイツが言ってる小さきもの達とは、なんとなく仲が良かったんだろうなってわかるから、余計に。

「あ、そうだ! 夏目、あの花守りの妖が住んでる場所って知ってるか?」

「ああ、知ってるよ」

「ナイスだ夏目!」

あの花守りの妖は、妖達に囃し立てられて俺にちよつかいをかけに来たと言っていたから、おそらくあいつの住む場所には色んな妖が集まってくるのだろう。ご神木から力を分けてもらっているようだし、その近くなら力が弱いつていう白毛玉も過ごしやすくなるかもしれない。それに、

「ものは違っても、同じ守る仕事なんだ。お前さえ良ければ、花守りの妖に置いてもらえないか聞きに行ってみないか?」

「ああ、恩に着る」